

大学生の養護性とそれに関連する諸要因の性差の検討

小林 真

Difference between Male and Female College Students on Nurturance and related variables

Makoto KOBAYASHI

要 約

本研究では、522名の大学生（男性292名、女性230名）に対して質問紙調査を行い、養護性とそれに影響を及ぼすと思われる4つの要因について性差の検討を行った。その結果、全ての尺度で性差の多変量主効果が有意となり、多くの項目でも性差が確認された。養護性やそれに関連する諸要因は、全て女性の方が得点が高かった。また、性別に因子分析を行った結果、乳幼児への親和性は男女ともに同じ構造であったが、それ以外の要因では因子に負荷する項目が異なっていたり、因子間相関のパターンが異なっていた。したがって、今後は、大学生の養護性や親準備性を検討する際には、男女別に尺度を構成した上で規定要因の検討を行う必要がある。

キーワード：次世代育成 養護性 親準備性

keywords：nurturing the next generation, nurturance, readiness for parenthood

問題と目的

2003（平成15）年9月に少子化対策基本法が施行された。この法律では、「家庭や子育てに夢を持ち、かつ、次代の社会を担う子どもを安心して生み、育てることができる環境を整備する」ことが目的とされている。したがって、若者がこれから家庭を持ち、自分が親になって子どもを育てるという意識を育てることは少子化対策や次世代育成を実施する上で大切な事業であるといえよう。

しかし日本では、自分が親になるまでに乳幼児と接した経験のある若者は減少している（原田, 2007）。したがって、親準備性の規定要因の検討が行われてきた。たとえば小林（2014）は、大学生を対象に親準備性を調査し、自分の親子関係の認知が親準備性に影響を及ぼしていることを確認した。しかし小林（2014）の研究では、両親の養育態度が親準備性の2つの下位尺度に与える影響力は男子学生の場合で8%と13%、女子学生で8%と10%であった。また小池（2013）は、青年期の女性を対象に親準備性と就学前及び成人期の愛着スタイルとの相関を検討したが、中程度から弱い相関しか得られなかった。

さらに諸井・木村・長井・堺・西田（2013）は、上記の研究とは異なった親準備性傾向尺度を用いて、過去の親子関係と現在の対人関係（アダルト・チルドレン傾向）が親準備性にどのような影響を及ぼし

ているかを検討した。その結果、自分の親を親のモデルと見なすかどうかに対しては、過去の肯定的な経験が正に、否定的な経験が負に影響を及ぼしていた。それ以外の下位尺度（子どもへの関心・将来の子育て不安・親役割への積極的期待）に影響を及ぼしていたのはアダルトチルドレン傾向の2つの下位尺度であった。これらの研究から、自分が経験した親子関係が青年の親準備性に及ぼす影響は小さいと考えられる。それでは、過去の親子関係以外に親準備性を高める要因は何であろうか。

川瀬（2010）によれば、乳幼児との接触経験を有している学生の方が、親準備性尺度の下位尺度である「乳幼児への好意感情」が高いことが示された。また、佐々木・小坂・末原・町浦・定藤・岡沢（2011）は大学生に「乳幼児とのふれあい育児体験プログラム」を実施し、プログラムに参加した学生と参加しなかった学生の比較を行った。その結果、育児体験をした学生のみで「乳幼児への好意感情」と「育児への積極性」の得点が高まった。これらの研究から、実際に乳幼児にふれあうことが親準備性を高めることにつながるといえる。

このように親準備性に関する研究はいくつか存在するが、今日の子育ては様々な社会ネットワークの中で行われるものである。この点について中村・田原（2012）は、様々な世代から「親になること」について調査を行い、強い関連性ではないが、「子育て

て」と「地域のつながり」という概念の間に関連性が見られたことを報告している。こうした結果から、中村・田原(2012)は、親準備性は養育者としての役割に限定されないと述べている。

中村・田原(2012)の指摘を踏まえ、本研究では親準備性よりもより広い概念である「養護性」について検討することとする。親準備性とは、自分が将来親になるための心構えや、養育スキルの獲得状況を表すが、養護性とは「相手の健全な発達を促進するために用いられる共感性と技能」である。したがって、様々な社会ネットワークの中で子育てをしていくためには、親子の関係だけでなく幅広い他者に関わる能力の基盤である養護性を身につける方が望ましいと考えられる。

岩治・井森(2011)は、大学1年次から2年次にかけての養護性の得点の変化を検討した。その結果、養護性得点及び下位尺度得点に変化は見られなかった。したがって、大学生活の中で養護性が自然に発達する可能性は低いと考えられる。そこで、養護性の規定要因を探る必要がある。礪波(2011)は、大学生を対象として養護性の規定要因を調査した。共分散構造分析によって養護性の下位尺度と、乳幼児への親和性、子どもに対するイメージ、育児についてのイメージ、および子どもとの接触体験との間の関連性を検討した。しかし礪波(2011)の研究では、何が最終的な目的変数となるのかが曖昧で、若者に対する次世代育成支援という観点からは有用な結論が得られなかった。したがって、今後は若者の親準備性や養護性がどのように形成されるのか、精緻化されたモデルを構築し、そのモデルにしたがって心理教育プログラムの効果を測定する研究を行う必要がある。

ところで養護性を検討するにあたって、養護性やその一部と考えられる親準備性には性差が存在することが指摘されている(たとえば佐々木, 2007; 川瀬, 2010; 礪波, 2011)。これらの研究では、親準備性や養護性は女性の方が得点が高いことが示されている。したがって、養護性の規定要因を検討する研究において、男女込みのデータで回帰的な解析手法を用いると、次のような問題が生じることになる。たとえばAという特性の高いものほど養護性が高いという結果が得られた場合、それは主に女性の方がAという特性が高く、したがって養護性も高いという性差が反映されていることになる。これ

では、男性と女性のそれぞれがどのように養護性を形成していくのかを解明したことにはならない。したがって、男女がそれぞれのジェンダー意識を形成する過程で、どのような要因が養護性の形成に寄与するかを検討する必要がある。こうした研究が蓄積されることによって、次世代育成をに対する有益な知見が得られるであろう。

そこで本研究では、まず養護性およびその規定要因と思われる特性に本当に性差が存在するのかを検討する。次に、もしそれぞれの尺度に性差が存在した場合には、性別に各尺度の因子分析を行い、男女間で養護性やそれに関連する尺度の意識構造を検討する。将来的な課題としては、性別に養護性の規定要因をモデル化することが望ましいが、本研究ではその準備段階として、性差を検討することを目的とする。

方 法

対象者 A県内の国立大学生・大学院生541名。内訳は男性304名(20.16±1.58歳)、女性237名(20.18±1.09歳)である。このうち回答に記入漏れのない522名(男性292名、女性230名)を分析対象とした。
手続き 質問紙調査を実施した。質問紙の配布・回収は次の2つの方法による。

- ①大学における講義の終了時に質問紙を配布し、その場で記入を求める
- ②著者の研究室に在籍する大学生の友人・知人を通じて配布し、後日回収する

調査内容 フェイス項目の他に、①乳幼児への親和欲求、②子どもへのイメージ、③乳幼児との関わり、④育児イメージ、⑤養護性の6尺度を実施した。詳細は以下の通りである。なお、評定尺度の選択肢の表記や得点の段階が尺度ごとに異なっているが、元の尺度の表記をそのまま使用した。

フェイス項目 性別、学年、年齢、所属学部(研究科)、対象者のきょうだいに関する情報、身近にいる乳幼児に関する情報、中学生または高校生時代の保育体験の有無を尋ねた。

- ①乳幼児への親和欲求 礪波(2011)の尺度を用いた。この尺度は「乳幼児が好き」「触れたい」「遊びたい」「守りたい」「世話をしたい」という5項目からなり、あてはまる(5点)～あてはまらない(1点)の5件法で回答を求めた。

②乳幼児へのイメージ 礪波 (2012) の尺度を用いた。この尺度は16組の形容詞（または形容動詞）対からなる SD 法の尺度である。たとえば「わがままな－思いやりのある」という語の対では左側に1点を、右側に7点を与えて7段階で回答を求めた。

③乳幼児との接触経験 礪波 (2011) の尺度に1項目を加えた11項目からなる尺度を使用した。元の尺度は乳幼児との接触経験を尋ねるものであるが、著者および幼児教育を専攻する大学生4名との協議により、「子育て体験がある人から子育てに関する話を聞く」という間接的な体験を加えることとした。それぞれの項目について、かなり経験がある（4点）～全く経験がない（1点）の4件法で回答を求めた。

④育児についてのイメージ 礪波 (2011, 2012) の調査で、因子分析により十分な負荷量を示さなかった1項目を削除し、15項目からなる尺度を使用した。それぞれの項目に対して、あてはまる（5点）～あてはまらない（1点）の5件法で回答を求めた。

⑤養護性 棚沢・福本・岩立 (2009) が作成した25項目からなる尺度のうち、保育者としての

養護性を想定した2項目（「大勢の子どもを相手にして遊ばせることができる」など）を削除した23項目を使用した。それぞれの項目に対して、とてもあてはまる（6点）～全くあてはまらない（1点）の6件法で回答を求めた。

倫理的配慮 質問紙の依頼文に、調査は無記名で行い個人を特定することはないこと、調査への協力は任意であり調査に協力しないことによる不利益は一切生じないこと、途中で協力をやめることは自由であること、を明示した。特に、授業終了時に配布する際には成績評価とは一切関係のないことを説明した。また、問い合わせ先として著者の研究室の電話番号と電子メールのアドレスを記載した。

調査期間 調査は2014年10月～11月に実施した。

結 果

1. 各尺度の記述統計量と性差の検討

本研究で用いた5つの尺度の性別の記述統計量を Table 1 に示す。性差が見られるかどうかを検討するため、尺度ごとに全項目を従属変数とする多変量分散分析を実施した。その結果を以下に述べる。

Table 1 各項目の記述統計量（ ）内は標準偏差

No.	項 目	全 体		男 性		女 性		p
		平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
乳幼児への親和欲求								

1	乳幼児が好き	3.652	1.171	3.497	1.132	3.852	1.193	***
2	乳幼児に触れたい	3.357	1.216	3.105	1.106	3.679	1.275	***
3	乳幼児と遊びたい	3.414	1.251	3.234	1.141	3.646	1.347	***
4	守ってあげたい	3.699	1.078	3.599	1.061	3.827	1.089	*
5	世話をしたい	3.146	1.181	2.987	1.069	3.350	1.285	***
乳幼児へのイメージ								

1	だらしない — きちんとした	3.344	.933	3.286	1.021	3.418	.802	ns.
2	わがままな — 思いやりのある	2.773	1.106	2.688	1.168	2.882	1.014	+
3	頼りない — 頼もしい	2.834	1.141	2.865	1.162	2.793	1.114	ns.
4	無責任な — 責任感のある	2.902	1.114	2.826	1.177	3.000	1.021	+
5	にぎやかな — 静かな	2.235	1.270	2.299	1.400	2.152	1.079	ns.
6	無気力な — 意欲的な	5.519	1.342	5.500	1.426	5.544	1.230	ns.
7	暗い — 明るい	5.833	1.084	5.806	1.185	5.869	.938	ns.
8	落ち着いた — 落ち着きのない	5.645	1.178	5.648	1.247	5.641	1.086	ns.
9	おだやかな — はげしい	5.135	1.101	5.214	1.184	5.034	.978	+
10	不愉快な — 愉快的	5.170	1.237	5.069	1.297	5.300	1.146	*
11	厳しい — 優しい	4.756	1.101	4.727	1.126	4.792	1.070	ns.
12	嫌いな — 好きな	5.057	1.283	4.875	1.231	5.291	1.313	***
13	悪い — 良い	5.081	1.190	4.914	1.177	5.295	1.174	***
14	弱気な — 強気な	4.610	1.104	4.622	1.151	4.595	1.044	ns.
15	弱々しい — たくましい	4.048	1.455	3.987	1.483	4.127	1.418	ns.
16	こわい — やさしい	4.708	1.089	4.694	1.091	4.726	1.088	ns.

(次ページにつづく)

乳幼児との接触経験							***
1	抱っこをする	2.262	.924	2.145	.922	2.414	.905 ***
2	おむつを交換する	1.311	.661	1.171	.449	1.489	.827 ***
3	お風呂に入れる	1.246	.606	1.178	.482	1.333	.727 **
4	遊び相手をする	2.647	.936	2.526	.940	2.802	.911 ***
5	トイレの世話をする	1.336	.692	1.178	.447	1.540	.875 ***
6	子どもを寝かしつける	1.501	.834	1.332	.628	1.717	1.000 ***
7	半日以上一人で世話をする	1.318	.701	1.273	.630	1.376	.780 +
8	泣いている子どもをなだめる	1.819	.914	1.683	.849	1.992	.965 ***
9	ミルクを飲ませる	1.348	.697	1.217	.532	1.515	.837 ***
10	衣服を着替えさせる	1.543	.846	1.337	.640	1.806	.994 ***
11	子育て体験がある人から子育てに関する話を聞く	1.928	.895	1.704	.827	2.215	.897 ***
育児についてのイメージ							***
1	嬉しい	3.574	.918	3.408	.922	3.788	.869 ***
2	いらいらする	3.303	.966	3.141	.987	3.511	.900 ***
3	忍耐力のいる	4.322	.803	4.215	.867	4.460	.692 ***
4	やりがいがある	4.072	.882	3.921	.933	4.267	.772 ***
5	汚い	2.893	.996	3.000	.930	2.755	1.061 **
6	楽しい	3.695	.885	3.563	.888	3.865	.853 ***
7	不安な	3.871	.916	3.773	.932	3.996	.881 **
8	大切な	4.344	.778	4.304	.826	4.397	.709 ns.
9	束縛される	3.586	.952	3.569	.941	3.608	.967 ns.
10	幸せな	4.081	.849	3.947	.871	4.253	.789 ***
11	自分の成長になる	3.950	.892	3.786	.896	4.160	.843 ***
12	面倒な	3.340	1.001	3.375	.977	3.295	1.032 ns.
13	大変な	4.351	.767	4.286	.804	4.435	.708 ***
14	愛情にあふれた	4.275	.796	4.135	.823	4.456	.721 ***
15	心が癒される	3.797	.937	3.734	.904	3.878	.973 +
養護性							***
1	幼児の姿を見かけるとつい目で追ってしまう	3.937	1.423	3.454	1.371	4.557	1.239 ***
2	幼児の遊び相手になる自信はない	3.514	1.376	3.500	1.340	3.532	1.425 ns.
3	幼い子どもが泣いていると何かしてあげたいと思う	4.126	1.118	3.970	1.111	4.328	1.097 ***
4	子どもが好きなほうだと思う	4.045	1.411	3.861	1.367	4.280	1.434 ***
5	子育てにはいろいろ煩わしいことが多いのではないかと思う	4.306	.997	4.341	1.015	4.262	.974 ns.
6	幼い子どもの瞳にひきつけられるものを感じる	3.911	1.304	3.648	1.234	4.249	1.315 ***
7	できれば自分も親になって子どもを育てようと思う	4.435	1.321	4.221	1.256	4.709	1.354 ***
8	子どもが不安そうな顔をしているときは、不安を取り除いてあげたい	4.375	1.103	4.217	1.077	4.578	1.104 ***
9	幼い子どもがぐずっている時、うまくなだめることができる	2.869	1.132	2.819	1.095	2.932	1.177 ns.
10	幼い子どもの話し相手になれると思う	3.312	1.256	3.195	1.215	3.464	1.295 **
11	子どもが遊んでいるのをみていると楽しくなる	4.253	1.214	4.023	1.181	4.549	1.194 ***
12	幼い子どもを飽きさせないで30分以上遊ばせることができる	3.033	1.283	2.977	1.273	3.105	1.296 ns.
13	小さい子どもをみても別にかわいいと感じない	2.314	1.208	2.559	1.190	2.000	1.161 ***
14	幼い子どもの世話には自信がある	2.668	1.158	2.632	1.088	2.713	1.243 ns.
15	自分は子どもを育て、よい親になろうと思っている	4.386	1.314	4.191	1.291	4.637	1.303 ***
16	子どもの心の動きに興味がある	3.993	1.277	3.775	1.226	4.271	1.289 ***
17	自分は将来我が子に慕われる親になれるような気がする	3.349	1.138	3.314	1.175	3.394	1.088 ns.
18	将来、子どもをうまく育てられると思う	3.189	1.087	3.165	1.097	3.219	1.075 ns.
19	小さい子どもをみると自分も笑顔になっている	4.257	1.267	3.967	1.213	4.629	1.241 ***
20	子どもがわがままなことをいっているのを見ると叩きたくなると思う	2.340	1.073	2.428	1.112	2.228	1.012 *
21	テレビに小さい子どもが出てくると興味を持ってみる	2.985	1.355	2.612	1.102	3.464	1.494 ***
22	赤ん坊をあやすのがうまいと思う	2.616	1.109	2.530	1.043	2.726	1.181 *
23	幼い子どもはあまり好きになれない	2.458	1.246	2.595	1.199	2.283	1.286 **

ns. non significant, + p<.10, * p<.05, ** p<.01, *** p<.001

(注) 尺度名についているアスタリスクは多変量主効果を、各項目についているアスタリスクは個別変量主効果を表す

①乳幼児への親和欲求

性別を独立変数とし、全5項目を従属変数とする多変量分散分析をおこなった結果、 $\Lambda=.935$, F

(5,535)=7.471 ($p<.001$) で有意な多変量主効果が得られた。個別変量について検討したところ、項目1では $F=12.541$ ($p<.001$)、項目2では $F=31.362$

($p<.001$), 項目 3 では $F=14.813$ ($p<.001$), 項目 4 では $F=6.026$ ($p<.05$), 項目 5 では $F=12.880$ ($p<.001$) となり, すべての項目で女性の方が乳幼児に対して親和的であった (いずれも $df=1,539$)。

②乳幼児へのイメージ

性別を独立変数とし, 全16項目を従属変数とする多変量分散分析をおこなった結果, $\Lambda=.927$, $F(16,522)=2.551$ ($p<.001$) で有意な多変量主効果が得られた。個別変量について検討したところ, 項目 1・3・5・6・7・8・11・14・15・16では性差は見られなかった。

有意差が見られたのは 3 項目で, 項目10では $F=6.432$ ($p<.05$), 項目12では $F=22.292$ ($p<.001$), 項目13では $F=19.053$ ($p<.001$) となり, 女性の方が乳幼児に対して好意的なイメージを抱いていた (いずれも $df=1,537$)。また性差が有意傾向となったのは 3 項目で, 項目 2 では $F=4.528$, 項目 4 では $F=4.029$, 項目 9 では $F=3.697$ となった。項目 2・4では女性の方が平均値が高く, 乳幼児を向社会的であると感じる傾向にあった。項目 9 に関しては男性の方が平均値が高く, 乳幼児を“はげしい”と感じる傾向にあった (いずれも $df=1,537$)。

③乳幼児との接触経験

性別を独立変数とし, 全11項目を従属変数とする多変量分散分析をおこなった結果, $\Lambda=.855$, $F(11,527)=8.119$ ($p<.001$) で有意な多変量主効果が得られた。個別変量について検討したところ, 10項目で有意な性差が見られ, 1項目で性差が有意傾向となった。

項目 1 では $F=10.243$ ($p<.001$), 項目 2 では $F=13.366$ ($p<.001$), 項目 3 では $F=3.308$ ($p<.01$), 項目 4 では $F=10.547$ ($p<.001$), 項目 5 では $F=17.651$ ($p<.001$), 項目 6 では $F=19.465$ ($p<.001$), 項目 7 では $F=1.346$ ($p<.10$), 項目 8 では $F=12.445$ ($p<.001$), 項目 9 では $F=11.652$ ($p<.001$), 項目 10では $F=29.104$ ($p<.001$), 項目11では $F=35.427$ ($p<.001$) であった (いずれも $df=1,537$)。すべての項目で女性の方が平均値が高く, 女性の方が乳幼児とのかかわりの経験が多いことが示された。

④育児についてのイメージ

性別を独立変数とし, 全15項目を従属変数とする多変量分散分析をおこなった結果, $\Lambda=.847$, $F(15,519)=6.244$ ($p<.001$) で有意な多変量主効果が得られた。個別変量について検討したところ, 項目

8・9・12では性差は見られなかった。有意差が見られたのは11項目で, 項目15のみ性差が有意傾向となった (いずれも $df=1,533$)。

項目 1 では $F=23.893$ ($p<.001$), 項目 2 では $F=19.082$ ($p<.001$), 項目 3 では $F=12.003$ ($p<.001$), 項目 4 では $F=21.159$ ($p<.001$), 項目 5 では $F=7.855$ ($p<.01$), 項目 6 では $F=17.043$ ($p<.001$), 項目 7 では $F=8.153$ ($p<.01$), 項目10では $F=18.692$ ($p<.001$), 項目11では $F=24.201$ ($p<.001$), 項目13では $F=4.678$ ($p<.031$), 項目14では $F=22.787$ ($p<.001$), 項目15では $F=3.508$ ($p<.10$) であった (いずれも $df=1,533$)。項目 5 のみ男性の方が平均値が高く, 男性は育児を汚いと感じていた。それ以外の項目はすべて女性の方が平均値が高く, 女性の用が育児に対して肯定的な感情と否定的な感情 (負担感・拘束感) の両方を強く感じていることが示された。

⑤養護性

性別を独立変数とし, 全23項目を従属変数とする多変量分散分析をおこなった結果, $\Lambda=.758$, $F(23,498)=6.898$ ($p<.001$) で有意な多変量主効果が得られた。個別変量について検討したところ, 項目 2・5・9・12・14・17・18では性差は見られなかったが, 残りの項目は全て有意な性差が見られた。

項目 1 では $F=97.576$ ($p<.001$), 項目 3 では $F=15.376$ ($p<.001$), 項目 4 では $F=14.323$ ($p<.001$), 項目 6 では $F=33.362$ ($p<.001$), 項目 7 では $F=22.073$ ($p<.001$), 項目 8 では $F=18.404$ ($p<.001$), 項目10では $F=7.223$ ($p<.01$), 項目11では $F=27.214$ ($p<.001$), 項目13では $F=30.567$ ($p<.001$), 項目15では $F=16.500$ ($p<.001$), 項目16では $F=22.313$ ($p<.001$), 項目19では $F=42.032$ ($p<.001$), 項目20では $F=6.460$ ($p<.05$), 項目21では $F=59.367$ ($p<.001$), 項目22では $F=4.591$ ($p<.05$), 項目23では $F=9.447$ ($p<.01$) であった (いずれも $df=1,520$)。項目13・20・23は男性の方が平均値が高く, それ以外の項目は女性の方が平均値が高かった。すなわち, 男性は小さい子どもに対してかわいいと感じない・興味を持たない・好きになれない傾向があり, 女性は子どもをかわいいと思ったり興味・関心を示したりすることが示された。

2. 性別の因子構造の検討

これまでの検討で, 養護性とそれに関連する諸要

因の間に性差が存在することが確認された。そこで以下では、それぞれの尺度を対象として性別に因子分析を行い、意識構造の違いを検討する。5つの尺度を対象とする因子分析の方法は全て同一である。まず最尤法によって因子分析を行い、固有値の減衰状況と解釈可能性を考慮しながら因子数を決定する。次に、因子負荷量が0.4未満の項目や複数の因子にまたがって同等に負荷した項目を削除し、再度因子分析を行う。これを Promax 回転し、最終的な因子構造を特定する。なお、以下に掲載する因子分析結果 (Table 2-1～6-2) は、全てパターン行列である。

①乳幼児への親和性

男性を対象とした因子分析も、女性を対象とした因子分析も1因子構造となり、因子負荷の順序も同一であった。したがって、男性も女性も乳幼児への親和性は同じ意識構造であるといえる。因子分析の結果を Table 2-1・2-2 に示す。男性の因子分析における適合度は $\chi^2(5) = 55.39$ ($p < .001$)、回転前の寄与率は68.98%であった。女性の因子分析における適合度は $\chi^2(5) = 29.69$ ($p < .001$)、回転前の寄与率は76.30%であった。

Table 2-1 乳幼児に対する親和性の因子分析結果 (男性)

No.	項 目	負荷量
3	乳幼児と遊びたい	.925
2	乳幼児に触れたい	.912
1	乳幼児が好き	.900
5	世話をしたい	.755
4	守ってあげたい	.617

Table 2-2 乳幼児に対する親和性の因子分析結果 (女性)

No.	項 目	負荷量
3	乳幼児と遊びたい	.961
2	乳幼児に触れたい	.929
1	乳幼児が好き	.903
5	世話をしたい	.869
4	守ってあげたい	.675

②乳幼児へのイメージ

男女ともに4因子構造となった (Table 3-1・3-2)。抽出された因子の順序や各項目の因子に対する負荷量に違いはあるが、両性に共通する因子が抽出されたと見なすことができる。

Table 3-1 幼児へのイメージの因子分析結果 (男性)

No.	項 目	F1	F2	F3	F4
3	頼りない — 頼もしい	.777	-.078	-.029	.164
4	無責任な — 責任感のある	.772	-.032	.000	-.111
1	だらしない — きちんとした	.748	-.039	.156	.027
2	わがままな — 思いやりのある	.621	.120	-.220	-.063
13	悪い — 良い	-.092	.892	-.068	.029
12	嫌いな — 好きな	-.101	.886	-.099	-.025
10	不愉快な — 愉快的な	.066	.508	.393	-.088
16	こわい — やさしい	.055	.505	.052	.098
11	厳しい — 優しい	.079	.462	.078	.056
7	暗い — 明るい	.139	.111	.819	-.117
6	無気力な — 意欲的な	.181	.113	.656	.107
8	落ち着いた — 落ち着きのない	-.262	-.064	.583	-.017
5	にぎやかな — 静かな	.153	.020	-.558	-.010
9	おだやかな — はげしい	-.258	-.150	.500	.089
15	弱々しい — たくましい	.127	-.016	.001	.739
14	弱気な — 強気な	-.115	.124	.001	.716
因子相関行列		F2	F3	F4	
		F1	.105	-.395	-.044
		F2		.238	.023
		F3			.227

Table 3-2 幼児へのイメージの因子分析結果（女性）

No.	項 目	F1	F2	F3	F4
13	悪い — 良い	.930	-.077	-.079	-.095
12	嫌いな — 好きな	.899	-.033	-.030	.010
10	不愉快な — 愉快的な	.613	.038	.185	.100
16	こわい — やさしい	.583	.052	-.131	-.021
11	厳しい — 優しい	.455	.109	.145	.030
4	無責任な — 責任感のある	.001	.790	-.007	-.096
3	頼りない — 頼もしい	-.041	.699	.030	.174
2	わがままな — 思いやりのある	-.002	.627	-.036	-.041
1	だらしない — きちんとした	.080	.498	.013	-.072
7	暗い — 明るい	.142	.077	.652	.028
5	にぎやかな — 静かな	.020	.023	-.604	.058
9	おだやかな — はげしい	-.157	.007	.552	.008
8	落ち着いた — 落ち着きのない	-.038	-.245	.530	-.041
6	無気力な — 意欲的な	.109	.048	.472	.117
15	弱々しい — たくましい	.022	-.052	-.115	1.019
14	弱気な — 強気な	-.037	-.011	.174	.521
因子相関行列		F2	F3	F4	
		F1	.295	.108	.154
		F2		-.287	.406
		F3			.061

男性の因子分析における適合度は $\chi^2(65)=183.813$ ($p<.001$) で、回転前の累積寄与率は52.40%であった。第1因子には「頼りない—頼もしい」「無責任な—責任感のある」などの因子が負荷したため、「頼もしさ」と命名した。第2因子には「悪い—良い」「嫌いな—好きな」などの因子が負荷したため、「好意性」と命名した。第3因子には「暗い—明るい」が正に負荷し、「にぎやかな—静かな」が負に負荷したことから、「快活さ」と命名した。第4因子には「弱々しい—たくましい」「弱気な—強気な」の2項目が負荷したため、「たくましさ」と命名した。

女性の因子分析における適合度は $\chi^2(62)=123.913$

($p<.001$) で、回転前の累積寄与率は47.80%であった。第1因子には男性の第2因子と同じ項目が負荷したため、「好意性」と命名した。第2因子には男性の第1因子と同じ項目が負荷したため、「頼もしさ」と命名した。第3因子・第4因子には男性の因子と同じ項目であったため、それぞれ「快活さ」「たくましさ」と命名した。

③乳幼児との接触経験

男女ともに2因子構造となった (Table 4-1・4-2)。抽出された因子には男女でほぼ同じであったが、男性では項目7「半日以上一人で世話をする」という経験がどちらの因子にも負荷しなかったのに

Table 4-1 乳幼児との接触経験の因子分析結果（男性）

No.	項 目	F1	F2
2	おむつを交換する	.894	-.130
5	トイレの世話をする	.640	.059
3	お風呂に入れる	.632	.017
9	ミルクを飲ませる	.580	.125
10	衣服を着替えさせる	.535	.246
4	遊び相手をする	-.118	.948
1	抱っこをする	.087	.748
8	泣いている子どもをなだめる	.179	.618
11	子育て体験がある人から子育てに関する話を聞く	.018	.533
		因子相関行列	F2
		F1	.677

Table 4-2 乳幼児との接触経験の因子分析結果（女性）

No.	項 目	F1	F2
2	おむつを交換する	.940	-.078
9	ミルクを飲ませる	.834	-.015
5	トイレの世話をする	.789	.106
3	お風呂に入れる	.773	-.116
6	子どもを寝かしつける	.674	.246
10	衣服を着替えさせる	.669	.288
7	半日以上一人で世話をする	.567	.139
4	遊び相手をする	-.192	1.025
1	抱っこをする	.101	.780
8	泣いている子どもをなだめる	.365	.560
11	子育て体験がある人から子育てに関する話を聞く	.085	.472
因子相関行列		F1	F2
		.677	

対して、女性では第1因子に負荷しており、これまでの乳幼児の接触経験の違いが反映された因子構造となった。

男性の因子分析における適合度は $\chi^2(19)=72.29$ ($p<.001$)で、回転前の累積寄与率は53.23%であった。第1因子には「おむつを交換する」「お風呂に入れる」「ミルクを飲ませる」などの項目が負荷したため、「日常の世話」と命名した。第2因子には「遊び相手をする」「泣いている子どもをなだめる」などの項目が負荷したため、「遊び相手」と命名した。

女性の因子分析における適合度は $\chi^2(34)=96.219$ ($p<.001$)で、回転前の累積寄与率は66.42%であった。第1因子には男性と同じ項目に「半日以上一人で世話をする」という項目を加えた内容であり、「日常の世話」と命名した。第2因子は男性と同じ項目であったため「遊び相手」と命名した。

④育児についてのイメージ

男女ともに3因子が抽出されたが、項目の負荷パターンに違いが見られた。因子分析の結果をTable 5-1・5-2に示す。

男性の場合には、因子負荷量の問題から項目7が削除された。因子分析における適合度は $\chi^2(42)=85.613$ ($p<.001$)で、回転前の累積寄与率は50.95%であった。第1因子には「楽しい」「幸せな」「やりがいのある」などの項目が負荷したため、「幸福感」と命名した。第2因子には「汚い」「面倒な」「いらいらする」などの項目が負荷したため、「嫌悪感」と命名した。第3因子には「忍耐力のいる」「たいへんな」の2項目が負荷したため、「負担感」と命名した。

Table 5-1 育児へのイメージの因子分析結果（男性）

No.	項 目	F1	F2	F3
6	楽しい	.845	.129	-.317
10	幸せな	.767	-.058	.163
1	嬉しい	.739	-.054	-.103
4	やりがいがある	.689	.003	.148
15	心が癒される	.662	-.050	-.017
11	自分の成長になる	.631	.055	.028
14	愛情にあふれた	.593	-.060	.418
5	汚い	.075	.684	-.140
12	面倒な	-.058	.667	.067
9	束縛される	.039	.550	.147
2	いらいらする	-.108	.453	.244
3	忍耐力のいる	-.002	.093	.606
13	大変な	.039	.303	.595
因子相関行列		F1	F2	F3
			-.180	.369
				.445

Table 5-2 育児へのイメージの因子分析結果（女性）

No.	項 目	F1	F2	F3
6	楽しい	.886	-.291	.131
10	幸せな	.810	.111	.033
15	心が癒される	.756	-.075	-.063
1	嬉しい	.719	-.133	-.014
14	愛情にあふれた	.616	.368	-.137
11	自分の成長になる	.467	.217	-.043
13	大変な	.031	.707	.061
3	忍耐力のいる	-.049	.679	-.049
7	不安な	-.093	.534	.099
12	面倒な	-.042	.115	.696
5	汚い	-.048	-.128	.656
9	束縛される	.086	.265	.610
因子相関行列		F1	F2	F3
			.281	-.412
				.297

女性の場合には、因子負荷量の問題から項目 2・4・8 が削除された。女性の因子分析における適合度は $\chi^2(33)=63.884$ ($p<.001$) で、回転前の累積寄与率は 51.97% であった。第 1 因子は項目 4「やりがいがある」が削除されたことを除けば男性の場合と同じ項目が負荷したため、「幸福感」と命名した。第 2 因子は、男性の第 3 因子に負荷した 2 項目に加えて、男性では削除されていた項目 7「不安な」が負荷している。育児不安も含めた内容として「負担感」と命名した。第 3 因子は男性の第 2 因子に負荷した項目から、項目 2「いらいらする」を除いた 2 項目が負荷したため、「嫌悪感」と命名した。

⑤養護性

男女ともに 4 因子が抽出されたが、因子の負荷パターンに違いが見られた。因子分析の結果を Table 6-1・6-2 に示す。

男性の場合には、因子負荷量の問題から項目 21 が削除された。因子分析における適合度は $\chi^2(149)=438.085$ ($p<.001$) で、回転前の累積寄与率は 61.27% であった。第 1 因子には「子どもが遊んでいる

のをみていると楽しくなる」「幼児の姿を見かけるとつい目で追ってしまう」などの項目が負荷したため、「子どもへの関心」と命名した。第 2 因子は「幼い子どもがぐずっている時、うまくなだめることができる」「幼い子どもの世話には自信がある」などの項目が負荷したため、「子どもの世話」と命名した。第 3 因子は「自分は将来我が子に慕われる親になれるような気がする」「将来、子どもをうまく育てられると思う」などの項目が負荷したため、「親への準備性」と命名した。第 4 因子は「幼い子どもはあまり好きになれない」「子どもがわがままなことをいっているのを見ると叩きたくなると思う」などの項目が負荷したため、「子どもへの嫌悪感」と命名した。

女性の場合には、因子負荷量の問題から項目 5・21 が削除された。因子分析における適合度は、 $\chi^2(132)=320.345$ ($p<.001$) で、回転前の累積寄与率は 67.97% であった。第 1 因子は男性と同じ項目に加えて、項目 15「自分は子どもを育て、よい親になろうと思っている」が負荷したが、全体的な内容

Table 6-1 養護性の因子分析結果 (男性)

No. 項 目	F1	F2	F3	F4
11 子どもが遊んでいるのをみていると楽しくなる	.780	.073	-.027	-.047
6 幼い子どもの瞳にひきつけられるものを感じる	.771	.102	-.049	.132
1 幼児の姿を見かけるとつい目で追ってしまう	.706	.193	-.080	.134
8 子どもが不安そうな顔をしているときは、不安を取り除いてあげたい	.699	-.166	.219	.050
19 小さい子どもをみると自分も笑顔になっている	.683	.203	.068	-.006
3 幼い子どもが泣いていると何かしてあげたいと思う	.635	-.029	.044	.025
7 できれば自分も親になって子どもを育てようと思う	.535	-.215	.444	-.167
4 子どもが好きなほうだと思う	.534	.293	-.025	-.213
16 子どもの心の動きに興味がある	.459	.147	.333	.199
9 幼い子どもがぐずっている時、うまくなだめることができる	.006	.866	.021	.083
14 幼い子どもの世話には自信がある	-.027	.796	.172	.041
22 赤ん坊をあやすのがうまいと思う	-.052	.786	.160	.091
10 幼い子どもの話し相手になれると思う	.266	.693	-.040	-.001
12 幼い子どもを飽きさせないで 30 分以上遊ばせることができる	.262	.673	-.078	.019
2 幼児の遊び相手になる自信はない	.067	-.628	.054	.373
17 自分は将来我が子に慕われる親になれるような気がする	.026	.260	.715	.044
18 将来、子どもをうまく育てられると思う	-.045	.232	.699	-.038
15 自分は子どもを育て、よい親になろうと思っている	.363	-.182	.615	-.148
23 幼い子どもはあまり好きになれない	-.251	-.052	.069	.647
20 子どもがわがままなことをいっているのを見ると叩きたくなると思う	.075	.157	-.059	.580
13 小さい子どもをみても別にかわいいと感じない	-.375	.095	.088	.566
5 子育てにはいろいろ煩わしいことが多いのではないと思う	.480	-.264	-.162	.556
因子相関行列				
	F1	F2	F3	F4
		.569	.557	-.513
			.483	-.422
				-.250

Table 6-2 養護性の因子分析結果（女性）

No. 項 目	F1	F2	F3	F4
8 子どもが不安そうな顔をしているときは、不安を取り除いてあげたい	.888	-.019	.010	-.127
6 幼い子どもの腫にひきつけられるものを感じる	.881	.030	-.070	-.085
1 幼児の姿を見かけるとつい目で追ってしまう	.802	.030	-.101	.098
11 子どもが遊んでいるのをみていると楽しくなる	.790	.021	.003	.044
19 小さい子どもをみると自分も笑顔になっている	.759	-.008	.094	.100
16 子どもの心の動きに興味がある	.749	.010	-.013	-.065
3 幼い子どもが泣いていると何かしてあげたいと思う	.705	.253	-.158	.025
7 できれば自分も親になって子どもを育てようと思う	.527	-.134	.422	.061
4 子どもが好きなほうだと思う	.460	.301	-.097	.349
15 自分は子どもを育て、よい親になろうと思っている	.438	-.039	.399	.083
14 幼い子どもの世話には自信がある	-.049	1.024	-.059	-.093
9 幼い子どもがぐずっている時、うまくなだめることができる	.111	.856	.095	-.237
10 幼い子どもの話し相手になれると思う	.138	.789	-.012	-.014
22 赤ん坊をあやすのがうまいと思う	-.049	.757	.077	.085
12 幼い子どもを飽きさせないで30分以上遊ばせることができる	.120	.684	.081	-.039
2 幼児の遊び相手になる自信はない	.184	-.617	-.078	-.412
18 将来、子どもをうまく育てられると思う	.032	.141	.879	-.183
17 自分は将来我が子に慕われる親になれるような気がする	-.175	.055	.845	.121
23 幼い子どもはあまり好きになれない	.009	-.052	.000	-.864
20 子どもがわがままなことをいっているのを見ると叩きたくなると思う	.025	.101	.032	-.578
13 小さい子どもをみても別にかわいいと感じない	-.397	.182	-.034	-.566
因子相関行列				
	F1	F2	F3	F4
		.644	.575	.720
			.570	.523
				.476

から見て「子どもへの関心」と命名した。第2因子も男性と同じ項目が負荷したため、「子どもの世話」と命名した。第3因子は、男性の第3因子から項目15を除いた2項目が負荷したため、「親への準備性」と命名した。第4因子は、男性の第4因子から項目5「子育てにはいろいろ煩わしいことが多いのではないと思う」を除いた項目が負荷し、さらに負荷量が全て負であったことから「子どもへの好意」と命名した。

考 察

本研究では、次世代育成という観点から、大学生の養護性とそれに影響を及ぼすと思われる様々な変数についての調査を行った。まず得点に性差が見られるかを検討し、性差が存在したため、性別に因子分析を行い、意識構造の比較を行った。以下に、得点の性差と因子構造の違いについての考察を述べる。

1. 各尺度の性差について

本研究で取り上げた5つの尺度は全てにおいて

性差が存在した。各項目を詳細に検討すると、有意差が見られない項目も存在したが、全体的な傾向として女性の方が子どもや育児に対する肯定的な認識や感情を抱いていた。したがって、男女込みのデータを用いて分析した際に、もし何らかの要因Aが養護性に正の影響を及ぼしていたとすれば、その結果は要因Aに見られる男女差が養護性の男女差を予測していることになる。すなわち女性の方が要因Aの得点が高く、それに伴って女性の方が養護性の得点が高くなるということを述べているに過ぎない。これでは、養護性をどのように育成するかが明確にならない。そこで若者の養護性や親準備性の形成を論じる場合には、今後は男女別にそれぞれの規定要因を明らかにする必要があるといえよう。

2. 各尺度の因子構造の性差について

性別に因子分析を行ったところ、多くの尺度で男女に共通する因子が抽出された。しかし、負荷した項目に若干の違いが見られたり、因子の軸の相関の方向性が異なっていることも多かった。以下に、それぞれの尺度ごとの性差を述べる。

①乳幼児への親和性

乳幼児への親和性は男女共に 1 因子構造で、各項目の因子への負荷の順序も同一であった。したがって、乳幼児への親和性については、男女ともに今回用いた 5 項目で測定することが可能だといえる。

②乳幼児へのイメージ

乳幼児のイメージについては男女ともに 4 因子構造となり、抽出された因子の順番は異なるが、それぞれの因子に負荷した項目は同一であった。したがって、乳幼児に対するイメージはおおむね男女に共通していると考えられる。ただし因子間相関を見ると、女性では第 2 因子「頼もしさ」と第 4 因子「たくましさ」の間に中程度の正の相関が見られたが、男性では無相関であった。これらの結果から、乳幼児をどのような側面から認識するかについては男女で共通する次元が存在するが、男性は「頼もしさ」と「たくましさ」を別次元としてとらえているのに対して、女性の中では「頼もしさ」と「たくましさ」は互いに関連のある側面だととらえていることがわかる。

③乳幼児との接触経験

乳幼児との接触経験は、男女ともに 2 因子構造となり、特に第 2 因子「遊び相手」に関しては負荷した項目は同じであった。さらに 2 つの因子間にもやや強い正の相関が見られたことから、接触経験については男女の意識構造はほぼ同じだと考えられる。しかし第 1 因子「日常の世話」に負荷した項目については、女性では「子どもを寝かしつける」「半日以上一人で世話をする」という項目が負荷したのに対して、男性ではこの 2 項目が削除されていた。おそらく男子学生は、長い時間乳幼児と一緒に過ごしたり、寝かしつけるといった養育行動についてはほとんど経験が無いとため、個人差が反映されなかったと考えられる。したがって、今後の調査においてはこれらの項目を尋ねてもかまわないが、男性の場合にはフロア効果が生じて尺度から削除される可能性も考慮しておく必要がある。

④育児についてのイメージ

育児についてのイメージは、男女ともに 3 因子構造となったが、負荷した項目に若干の違いがあり、さらに因子の軸の相関のパターンに顕著な違いが見られた。第 1 因子「幸福感」に負荷した項目は男女とも同じであり、育児が楽しい・幸せだという意識は男女に違いがなかった。しかし「いらいらする」

という項目が男性では「汚い」「面倒な」といった項目と共に第 2 因子「嫌悪感」に負荷していたが、女性では第 3 因子が「嫌悪感」となり「いらいらする」という項目はどの因子にも高い負荷量を示さなかったため削除された。また男性の第 3 因子は女性の第 2 因子と同様に「負担感」を表す因子となったが、女性ではそこに「不安な」という育児不安に該当する項目が負荷していた。母親を対象に育児不安を調査した多くの先行研究では、不安感と負担感とは別の因子として抽出されることが多いが（たとえば小林・渡辺，2000），今回はまだ子育てを経験していない大学生が対象であり、さらに全体の項目数も少なかったことから、育児への不安と負担感が同じ因子に負荷したのと考えられる。さらに、男性では「不安な」という項目はどの因子にも負荷せずに削除されていた。

さらに因子間相関を見ると、男性では「負担感」が「幸福感」「嫌悪感」と中程度の正の相関を示しており、「幸福感」と「嫌悪感」の間には顕著な相関は見られなかった。すなわち、男性の意識の中では、育児に対する「幸福感」は「負担感」を伴うものとして認識されていることがわかる。そして「嫌悪感」は「幸福感」とは別の次元であることがわかる。これに対して女性では、「幸福感」が「嫌悪感」と中程度の負の相関を示し、「幸福感」と「負担感」および「負担感」と「嫌悪感」の間に弱い正の相関を示した。すなわち、女性の意識の中では育児に対する「幸福感」は「負担感」とは相容れない関係にあることがわかる。因子間相関からも、育児に対する喜びが負担とセットになっている男性と、負担とは相容れない関係にある女性の意識構造の違いがわかる。

⑤養護性

養護性尺度の因子分析では顕著な違いが見られた。最も大きな違いは、男性では子どもが好きでない・かわいいと思えないといった項目が正に負荷した「子どもへの嫌悪感」因子が抽出されたのに対して、女性ではこれらの項目が全て負に負荷した「子どもへの好意」因子となった点である。この分析結果からは、男性では「嫌悪感」因子に負荷していた項目を、女性では逆転項目として「好意」を表す因子に読み替えた方が大学生の養護性をより正確に把握できると考えられる。男性では、第 4 因子の「子どもへの嫌悪感」は第 1 因子「子どもへの関心」や

第2因子「子どもの世話」とは中程度の負の相関が見られたが、第3因子「親準備性」とは弱い負の相関しか見られなかった。したがって、男子大学生の中では、親への準備性は他の因子とは独立した意識であることがわかる。これに対して女性では、第4因子「子どもへの好意」が他の3つの因子と中程度からやや強い正の相関を示したことから、女性の意識構造の中では、「子どもへの関心」「子どもの世話」「親準備性」「子どもへの好意性」が相互に関連し合って養護性を構成していることがわかる。養護性の因子分析結果を見る限り、同じ尺度を用いて測定したとしても、男性の養護性と女性の養護性は因子構造が異なっているので、別の概念として捉える必要があるだろう。

3. 今後の課題

本研究では、次世代育成の鍵概念である養護性と、先行研究で養護性に影響を与えると想定されたいくつかの要因について性差の検討を試みた。その結果、個々の尺度については明らかに得点に性差があることが示された。さらに、男女別に因子分析を行ったところ、異なる因子が抽出された尺度や、因子間の相関のパターンが男女で異なる尺度などが存在していた。したがって今後は、仮に同じ質問紙を用いたとしても、男女別に下位尺度を構成した上で、男女それぞれの養護性がどのような要因によって規定されているのかを明らかにする必要がある。こうした作業を行うことによってのみ、男女それぞれに対して次世代育成という視点からどのような事前学習・体験活動が必要であるかを明らかにすることができるはずである。

引用文献

- 原田正文 2007 子育ての変貌と次世代育成支援
名古屋大学出版会
- 岩治まとか・井森澄江 2011 大学期における親準備性の発達(6)－大学入学1年後の養護性尺度得点の変化－ 日本教育心理学会総会発表論文集, **53**, 190.
- 川瀬隆千 2010 大学生の親準備性に関する研究
宮崎公立大学人文学部紀要, **17** (1), 29-40
- 小林真 2014 認知された親子関係は大学生の親性準備性にどのような影響を及ぼすか 富山大学人間発達科学部紀要, **8** (2), 43-48.
- 小林真・渡辺亜矢 2000 母親であることについての女性の自己意識－自己受容感と自己拒否感に関する調査－ 富山大学教育学部研究論集, **3**, 63-67.
- 小池優美 2013 青年期女性の親性準備性と就学前及び成人期の愛着スタイルとの関連 日本女子大学大学院人間社会研究科紀要, **19**, 99-113.
- 棚澤令子・福本俊・岩立志津夫 2009 大学生における過去の被養護・養護体験が現在の養護性(nurturance)へ及ぼす影響 教育心理学研究, **57** (2), 168-179.
- 諸井克英・木村有花・長井佐哉香・堺かおる・西田郁美 2013 親との接触経験が親準備性傾向の形成に及ぼす影響－女子青年の場合－ 同志社大学学術研究年報, **64**, 71-81.
- 中村翔・田原歩美 2012 次世代子育てに向けた親準備性概念の捉え直し－親準備性の世代間比較を通して－ 福山大学こころの健康相談室紀要, **6**, 27-34.
- 佐々木綾子 2007 親性準備性尺度の信頼性・妥当性の検討 福井大学医学部研究雑誌, **8** (1 & 2), 41-50.
- 礪波朋子 2011 女子大学生の乳幼児との接触経験と育児イメージ及び養護性との関連 京都光華女子大学研究紀要, **49**, 13-25.
- 礪波朋子 2012 青年期の子どもイメージ・育児イメージ及び養護性に関する研究 京都光華女子大学研究紀要, **50**, 41-52.

謝 辞

本研究を実施するにあたり、データの収集・入力に関して富山大学人間発達科学部(当時)の古澤美典さんの協力を得ました。ここに感謝の意を表します。なお本研究は、古澤さんが富山大学人間発達科学部に提出した特別研究論文とは異なり、著者の責任で分析を行い、新たに執筆したものです。

(2015年5月20日受付)

(2015年7月15日受理)